

# 街路樹

## 学力向上に向けて 31

### ～ 職人の手 ～

4月23日の夜、テレビ番組「アインシュタインの眼」で紹介された寿司職人の技に私はうなづいた。握る指と手のひらの絶妙な力加減。1個の寿司を完成させる際の、握る手数を減らす工夫。魚の鮮度を保ち、一番美味しいと感じる米粒の間隔まで配慮された技。そして、最大の驚愕は「親方の手は、冷たい。」という事実だった。

一般に手の体温は30度である。ところが、寿司を握る親方の手は16度しかなかった。自律神経が関係する人間の体温である。私は、きっと氷水にでも手をつけて、いつも冷たくしているのだろうと考えたが、映像による説明で見事に覆されることとなった。実験で示された事実を目の当たりにし、衝撃が走った。家で測定した親方の手は30度であったのに、お店に入り、服を着ると16度になったのだ。アナウンサーの質問に答え、親方は淡々と語った。「寿司職人なら、みんな手は冷たいです。」「味にこだわっていれば、手は冷たくなります。」私は、再びうなづいた。

職人は、親方だけではない。教員の世界だって寿司職人のように子どもを前にした途端変わるものがあるに違いない。私は「よい授業のすすめ」P18にある授業の構成要素の表をにらみ、「親方の手」に相当するもの考えた。

- 一つは、耳。聞こうとした時、声は聞こえる。つぶやきをとらえるには、聞こうとする意志を持ち鋭敏に感じ取る力が必要だ。
- 二つは、目。机間指導の際に、それまでの活動や考えを瞬時にとらえるには、今見えている情報から予測する力も必要だ。全体と個に目を配る。心理眼とでもいいくなる力だ。
- 三つは、口。表情豊かで穏やかな、そして時には厳しい口元。気配りのある、吟味された言葉は、子どもの心に届くだろう。

と考えたものの「思うは易く行は難し」だ。

例えば、つぶやきは聞こえるようで聞こえない。もし、聞こえてもそれをどの子の発言と関連させるのか。誰の意見を取り上げれば本時の目標につながるかの判断も必要になる。一方で、つぶやきを拾うよりも作業や練習に集中させなければならない時もある。このように、子どものつぶやきを考えても、一瞬の判断で動く場合と長期にわたって見守る場合がある。

**よい授業を目指して日々精進するとは、授業の質にこだわり、子どもをとらえる力を高めることである。**

**教員も「職人」であり、その手や心はあたたかい。**

◆ 昨年度に引き続き、「学力向上」「授業改善」指導技術「学級経営」「教育センター研修に関する情報」などを提供していきたいと思っております。ご活用いただければ幸いです。◆

### ～ アドラー心理学とは ～

◆ 基本的な考え方 ◆ … 学校教育に生かせる4つの考え方

- 1 **目的論**…「人間の行動には必ず目的がある」というもの。ある行動を理解しようとする場合、その原因ではなく目的を明らかにするとこからスタートする。
- 2 **対人関係論**…「人間の行動には特定の相手役が存在する」ということ。学校では様々な問題を起こしている子どもが、家ではいい子あたりです。相手役を選んでるのである。
- 3 **所属欲求**…最も基本的な欲求。欲求が満たされないと「自分は集団の中に居場所がなく、重要な存在であると認められたい」と感じ、問題行動を起こすようになる。  
また、客観的にどうかではなく、その人の主観的な見方や考え方が行動を決めるとも考えている。
- 4 **共同体感覚**…所属欲求が満たされると精神的に安定し、周囲の人や環境に関心を向け、受け入れてくれる仲間・集団・社会のために何らかの貢献をしようと感じるようになる。

## 授業改善・指導技術 21

### ～ 指示…授業づくりの基礎技術 その2 ～

理解させたり、考えさせたりする方法を「指示」することは、発問と同じくらい重要である。大事な技術は次の2点といわれる。

#### 1 「一時に一事を指示せよ」

「まず、たった一つの明確な指示を与えよ。それができたのを確かめてから、第二のたった一つの明確な指示を与えよ」これは、同時に二つも三つもの指示を与えることは、子どもの思考を混乱させるだけであり、子どもをざわつかせるものとなる。  
— 向山洋一著「授業の腕をあげる法則」より—

#### 2 「AさせたいならBといえ」

子どもたちに「A」ということをさせたい、あるいは考えさせたいとき、直接的に「A」と言わずに、間接的にそれと違った言葉である「B」と言えということである。「ゆれないモノ」(①物、②人、③場所、④数、⑤音、⑥色)を提示することにより、子どもたちはそれを支えにして行動する。

— 岩下 修著「指示の明確化で授業はよくなる」より—

## 学級経営のヒント 20

### ～ アドラー心理学に学ぶ学級づくり ～

- 1 **子どもとよい関係を築く**…「先生は自分たちを信頼し、尊敬してくれている」と子どもたちに感じられること。
- 2 **罰を用いない**…罰には即効性があり、問題行動が治まるかもしれない。しかし、多くの場合、罰を恐れて問題行動を止めたにすぎず、面従腹背の態度を身に付けてしまう。  
そして何より、信頼関係を壊してしまう。  
罰を用いないのであれば、どのように対処したらよいか。  
① 行為の結末を体験させる…勉強しなかった結末は、テストの成績が悪い。子どもは結末から学ぶ。  
② 子どもたち同士が解決策を話し合う。(配慮は必要)
- 3 **セオリーを身に付ける(問題行動の段階に応じて)**
  - ① **注目・関心**…問題行動に注目せず、適切な行動(ふだんの行動)を勇気づける。
  - ② **権力**…教師と争うことによって、子どもは自分の地位を確立しようとする。売られたケンカを買わないでぐっと我慢する。
  - ③ **復讐**…権力争いがこじれると、子どもは復讐の段階に入る。この段階になったら第三者の助けを借りることが必要となる。
  - ④ **無気力**…子どもがどこでも動こうとしない段階でも、教師は、あきらめず、見捨てず、ねばり強くかわり続けることが必要。
- 4 **子どもに所属感、貢献感を与える**…問題行動を防ぐ鉄則は、子どもの所属欲求を満たすことに尽きる。係活動や行事の際に役割を与えるなどの日常の働きかけがこそが、問題行動を予防し、「共同体感覚」を高める支援となる。
- 5 **どんな時でも、子どもを勇気づける**…子どもが元気になったり、意欲的になったりする働きかけは、基本的にはすべて「勇気づけ」である。「ほめる」ことは望ましい結果に対するメッセージであるが、「勇気づけ」は結果の良否にかかわらず、プロセスに注目した働きかけである。

— 学級経営と授業で使えるカウンセリング(ぎょうせい)より—